



Title	リフトンを日本人はどのように読んできたか
Author(s)	高原, 耕平
Citation	メタフュシカ. 2016, 47, p. 63-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リフトンを日本人はどのように読んできたか

高原耕平

はじめに

本稿では、アメリカにおけるサバイバー（生存者）研究・トラウマ研究の第一人者である R. J. リフトン（Robert Jay Lifton, 1926-）の著作と思想が、日本においてどのように受容されてきたのかを検討する。

リフトンはユダヤ系のアメリカ人精神科医であり、これまで朝鮮戦争捕虜、中国共産党による「洗脳」を受けた人々、広島の実験被爆者、ベトナム戦争帰還兵、ホロコーストに加担したドイツ人医師など、歴史的イベントを生き延びた人々（＝サバイバー）の精神状況を分析してきた。リフトンの研究が影響を及ぼす範囲は精神医学にとどまらず、いわゆる「トラウマ」をめぐる歴史的・社会的・倫理学的研究の新たな可能性を示している。

ところで、リフトンは単著・共著合わせて 20 冊以上の研究書を公刊しており、そのうち 10 冊が邦訳されている。しかし現在、日本においてリフトンその人の知名度はあまり高くない。

その原因として、リフトンの研究対象が上に挙げたようにきわめて多岐に渡ることが考えられる。もうひとつの原因として推測されることは、リフトンの研究を貫く基本的な姿勢、すなわちサバイバーの存在を尊重し、その声から智慧を得ようという姿勢が、日本の社会や学術文化において弱かったために、かれの思想が包括的に受容されてこなかった、ということである。

リフトンのこの姿勢は、広島の実験被爆者など日本人への聞き取り調査からかたち作られてきた。その日本でリフトンはそれなりに訳出されているのに、かれが聞き取ろうとしたことの根本的な部分は知られていないように思われる。実際のところ、これまでリフトンは日本でどのように読まれてきたのだろうか¹。

以下の各節では、『思想改造の心理』、『死の内の生命』、『*Home from the War*』などリフトンの代

¹ リフトンの研究全体を包括的に把握する作業も必要であるが、ここでは扱わない。高原「R. J. リフトンのサバイバー研究における「変容」思想について」（2015 年度修士論文）では、1950 年代から 80 年代にかけてのリフトンの思想の発展をまとめた。本稿はその一部を加筆修正したものである。

表的な著作を紹介しつつ、日本でそれらの著作がどのように読まれ、どのような影響を与えてきたか（こなかったか）を検討する。以上を通じて、リフトンの思想が日本では断片的にしか受容されてこなかったことを示したい。

1. 宗教学における受容：『思想改造の心理』『終末と救済の幻想』

リフトンは1950年代、中国共産党による「洗脳」を受けた後に香港に脱出した中国人や西洋人に対してインタビューを行い、閉鎖的環境で人間の心理が圧迫され制御されるプロセスを克明に分析した。『思想改造の心理 *Thought Reform*』（原著1961年、邦訳1979年）はその成果をまとめたものであるが、現在ではカルト教団などによる「マインド・コントロール」を論ずる際の基本文献の一つとなっている。

本書が宗教学の領域で参照されるようになったのは以下のような経緯による。本書はアメリカにおいて統一協会の信者を救出する元信者グループによって用いられていた。統一教会による信者の囲い込みのテクニックは、本書が分析している中国共産党による洗脳の技術と多くの類似点を持っていたからである。また、統一協会は共産主義を強く批判していたため、当の教団が「敵」のはずの中国共産党と同じテクニックを用いて信者を支配しているという認識を与えることは、信者を「脱洗脳」し、教団を脱会させるためにきわめて有効なロジックであった。

自身も統一協会の信者であったS. ハッサンは、『思想改造の心理』との出会いを経て教団から脱会し、本書をベースとしてカルト教団のマインド・コントロールについての研究を行う。ハッサンのマインド・コントロール論はカルト研究の基礎文献の一つとみなされており、リフトンの『思想改造の心理』もセットにして言及されることが多い。こうした文脈においてリフトンを参照している国内の研究として、島藪（1998a, 1998b）、櫻井（2004）などが挙げられる。

ところで、日本において「マインド・コントロール」の語が広く注目を集めたのは、オウム真理教をめぐる一連の事件においてのことだった。リフトンはそのオウム真理教の元信者たちにインタビューを行い、オウム真理教事件を独自に分析している（『終末と救済の幻想 *Destroying the World to Save It*』原著、邦訳ともに2000年）。リフトンはオウム事件をめぐる日本の宗教学の混乱から自由な立場で研究を行っているが、管見の限りでは、本書は国内のオウム真理教研究のなかで積極的には参照されていない。

以上のように、日本の宗教学研究において『思想改造の心理』は参照されているが、彼のオウム真理教研究は読まれていない。また、この2冊の間に出された諸研究も参照されていない。そのため、『思想改造の心理』以後にリフトンが発展させた、サバイバー研究の姿勢が十分読み込まれてはいない。すなわち、歴史的な事件の中で危機的体験をした「サバイバー」（たとえば地下鉄サリン事件の被害者や、オウム真理教の末期の教団生活を体験した信者や教団幹部）の証言を聞き取り、歴史的社会的な諸力が彼らの精神的な生活に与える長期的影響ないしは相互作用を把握し、暴力への感受性を麻痺させた現代社会を変革するための智慧を得ようという姿勢である。かれはこの方法論をE. エリクソンにならって精神史 *psychohistory* と名づけている。

この方法論を用いることで、たとえばオウム真理教の元信者や一連の事件の被害者の回復過程

を再検討するといった可能性もあるように思われるが、残念ながら現在まで方法論や理念のレベルでの受容はなされていないと考えられる。

2. 『死の内の生命』の受容と反発

リフトンは1962年4月から9月まで広島に滞在し、73名の被爆者に対するインタビュー調査を行った。リフトンは被爆者の語りを詳細に分析し、原爆が被爆者の心身に圧倒的な衝撃をもたらしただけでなく、深い罪責感を刻みつけ、被爆者の持つ生と死の観念を根こそぎ破壊していることを明らかにした。その内容は1968年にアメリカで*Death in Life*という題名で出版され、日本では『死の内の生命』として1971年に訳書が出版された²。

本書はアメリカで高い評価を受け、全米図書賞を受賞した。しかし日本人読者の応答は賛否両論だった。被爆者調査史における『死の内の生命』の位置づけは有末（2013）が論じており、また本書が日本人読者に引き起こした反応については八木（2013）が詳細にまとめている。本節では、これらの先行研究を補完するものとして、『死の内の生命』が日本でどのように読まれてきたかを以下の論点において検討してゆきたい。(1) リフトン以前に日本国内で行われた被爆者に対する精神神経学的研究と、リフトンの『死の内の生命』は、どのような点が異なっていたのか。(2) 被爆詩人・栗原貞子による批判はどのようなものであったか、彼女は何を求めていたのか。(3) 被爆者調査に携わった社会学者・石田忠はリフトンから何を読み取り、受け継いだのか。

2.1 〈初期研究〉との比較

『死の内の生命』の目的は、原爆が広島の被爆者に及ぼした影響を心理面から探ることであった。表向きの焦点は被爆者の「心理」にあるが、その探究は社会、歴史、文化といったさまざまな背景からアプローチされる。いわば被爆者の「生き方」全体を捉えようとするものである。リフトンのこのような方法は、被爆者に対するそれ以前の精神神経学的研究と比べてどのような点が異なっていたのだろうか。

終戦直後の1946年から、主に西日本の大学医学部において広島・長崎の被爆者に対して精神医学あるいは神経学の立場からいくつかの調査・研究が行われた。ところが、それらの研究は1961年を最後に終息してしまう。その次に被爆（者）を精神医学の見地から分析する研究が公表されたのは1987年のことである（野中ほか1987）。

終戦直後から1961年までの、被爆者に関する一連の精神神経学的研究を〈初期研究〉と仮に呼ぶこととする³。リフトンが広島で被爆者から聴き取り調査を行ったのが1962年であるから、これらの〈初期研究〉はおおむね「リフトン以前」と言い替えることができる。

〈初期研究〉の多くが問題にしていたのは、放射線・熱線による急性の危機を乗り越えた被爆

² 原著の題名を直訳すれば『生の内の死』であるが、邦訳書では訳者の判断により『死の内の生命』と逆転されている。改訂版（岩波現代文庫、2009年）では『ヒロシマを生き抜く』という題に再度変更されている。本節ではさしあたり『死の内の生命』に統一して表記する。

³ 中澤（2007）巻末に一連の〈初期研究〉のレビューが掲載されている。

者が訴える、気だるさや疲労感といった慢性的な不定愁訴だった。こうした慢性症状と被曝との間に何らかの関係があることは想定するものの、はっきりとした原因をつかむことができず、「ぶらぶら病」などと俗称されることもあった。都築（1954）は、原因不明の一群の症状を「慢性原子爆弾症」と仮に名付け、その背景には放射線による内臓への器質的ダメージと、精神的な要因の絡み合いがあると想定した。

操ほか（1954）は、原爆症の主因はむしろ不安神経症であるとする。これに対し、小沼（1953）は原爆症の患者が訴える症状が間脳症の症状と重なりあうことを見出し、単なる神経症としてではなく間脳へのダメージを想定すべきことを主張している。

現在の視点からすると、原爆から直接放たれた放射線とその後の内部被曝による、脳を含めた身体の各器官・細胞・遺伝子に対するさまざまなダメージと、社会的・心理的な要因とを複合的に考慮すべきであろう。したがって、操の立場は器質的・身体的要因を無視しすぎているし、

要するに、吾々医家は被爆者の健康管理または療養指導にあたって、彼等の心中を洞察し、八年を経過した今日もはや恐るべき障害が来ることは極めて稀であり、健康生活の維持によつてかかる障害の発起を予防し得べきことを説き、愛をもつて接し、決して吾々の言動によつて被曝に関して不安神経症を作らないように努めなければならない。（操ほか 1954: 21）

というかれの主張は、「不安」を医師の態度によっていかようにもコントロールするものとしてあまりに単純化しすぎているように思われる。パターンリズムが器質的・身体的要因と不安の内実への視線を妨げている。

これらの〈初期研究〉を『死の内の生命』と比較すると、前者は被爆者の訴える症状を精緻に書き取ろうとはしているものの、それらの症状を分類し、原因を確定させようとすることに、あまりに性急であるように感じられる。なるほど、かれら臨床医にとって、症状の分類と因果関係の推定は当然の方法論である。ところが当時は放射線が身体にダメージを与えるプロセスについて全く未知であったため、症状の分類から病因の確定へという方法論が手詰まりになってしまった感がある。したがって、「ぶらぶら病」などの現象に対しても、器質的要因によるものか心因性なのかという袋小路の議論に陥っている。

こうした議論とリフトンの手法を対比してみると、〈初期研究〉では被爆者ひとりひとりの物語を導き出すという作業が省略されていることがわかる。つまり、「不安」が原爆症の原因の一つであるか否かという因果関係の議論に終始してしまい、その「不安」の内実がどのような背景や文脈を持っているのかが聴き取られず、症例分類のなかでかき消されてしまっている。

その点では、さしあたり症状を総まとめにして「慢性原子爆弾症」と仮称しておくという都築の方針は、単なる折衷主義とみなすべきではない。器質性か心因性か、脳か内臓か、一次的放射線か内部被曝か、という因果関係の推断をいったんサスペンドすることができるからである。

このように、被爆者に関するそれまでの精神神経学的調査・研究とリフトンの『死の内の生命』は大きな違いを持っていた。しかし国内の精神医学から、リフトンの研究に対しては批判も受容

もなされなかった。このことが、1995年のPTSD概念の突然の導入という現象の歴史的遠因となる。

2.2 被爆詩人・栗原貞子による批判

『死の内の生命』は出版後、当の被爆者から激しい批判を受ける。原爆投下直後の防空壕での生の誕生を描いた詩「生まれめんかな」の作者として知られる被爆詩人・栗原貞子は、『死の内の生命』を2つのエッセイで批判している（栗原 1975, 1982）。その要点は次の3つにまとめられる。(1) 学術的な記述スタイルで一見すると中立的だが、結局のところ被爆者の在り方に否定的な結論を下している。(2) 原水禁運動への参加に否定的であり、運動アレルギーである。(3) アメリカ側の投下責任を曖昧にしており、むしろ投下を正当化する主張に近い。

順に見てゆこう。まず(1)については、栗原の誤読であるという印象が拭えない。栗原は、リフトンが「原爆症とマスコミ」の項で、マスコミは原爆症をセンセーショナルに扱っており、その中には誇張や偏見が含まれると論じていることを批判の論拠にしている。しかしリフトンは、センセーショナルな報道の源泉には被爆者の不安があり、ごく単純に、原爆が被爆者に遺した不安はそれほどまでに大きく根深いものであると断言しているにすぎない。リフトンの議論の道筋がややうねっていることも原因かもしれないが、栗原はマスコミが助長する偏見や誇張は被爆者の責任であるというように読み取ったように思われる。

同様に、栗原は『死の内の生命』の「原爆症と医師」の項において、リフトンが原爆症の存在に否定的な医師の発言に賛同していると批判している。しかしこれも、リフトンは原爆症に対する日米の医師の立場を4つの類型にまとめ、それぞれでそれぞれの発言を列挙しているにすぎず、とりたてて原爆症に否定的な医師の肩を持っているわけではない。むしろかれは、原爆が人間の実存にさまざまな影響をもたらすことを広い視野で認めるべきだと結論づけている。狭い意味での放射線障害のエビデンスの有無の議論にこだわらずに「原爆症」を捉えようとする立場であろう。

(2)については、たしかにリフトンは当時の原水爆反対運動からやや距離をとった記述に終始している。八木は、当時国内の原水禁運動が政治的分裂の渦中にあったために、このように距離をとったのかもしれないと推測している。船橋(2008)は、被爆者自身がこれらの運動に対する疑義をリフトンに語った可能性を指摘している。ただしこの研究の後、リフトンは明確に米国内で反核反戦の立場を取るようになってゆく。栗原の批判を直接聞き知ったとは考えられないが、結果として、彼女の批判を受け入れたに等しい態度変化であり、その点で栗原の批判は（その表現は行き過ぎであるにしても）本質を突いていたと言える。

栗原の批判は、彼女が被爆者としてリフトンに求めていたものと、リフトンが分析において提示したものとの間にズレがあったことに起因しているように思われる。栗原がリフトンに求めていたものは何だったのだろうか。この問いは(3)の批判に関わる。彼女の批判を読み直すと、リフトンが『死の内の生命』において反核の姿勢とアメリカの投下責任追及の姿勢を明示していないことからすれ違いが生まれているように思われる。要するに、旗幟鮮明にせよ、ということである。

アメリカの読者に向けたものとして『死の内の生命』を読むと、リフトンの記述は政治的にき

わめてラジカルな立場をとっている。本書の最終章で、リフトンは原爆の精神的影響を当時のホロコースト研究を参照しつつ分析しているが、この発想自体非常に過激なものであるかもしれない。というのも、原爆とホロコーストの同列化は、ユダヤ人亡命者を受け容れ、ナチス・ドイツを倒し、収容所からユダヤ人たちを解放した「アメリカ」が、ホロコーストと同質の行為を広島と長崎の市民に対して行っていたのだという理解へと接続するからである。いま『死の内の生命』を丁寧に読んでゆくと、リフトンが中立的な記述という見かけを守りながら、アメリカの投下責任と核軍縮の停滞を同国民に問いかけようとしているようにも思われる。

しかし栗原は、そうした「中立的」な記述を逆に書き手の立場を曖昧にするものとして受け取った。彼女はリフトンに、まずなにより自分たち被爆者の味方であるか否かを明示せよと迫っているのではないか。

ここには、後述するベトナム帰還兵研究でリフトンが強調したアドボカシー（advocacy 参弁、倫理的参入）の問題が現れている。リフトンによれば、ベトナム戦争に従軍した米軍の精神科医や従軍聖職者の多くが、中立的な立場から兵士たちに親身にアドバイスしているかのような態度を取りつつ、実のところ任務や戦争そのものの無意味さや、戦友の死といった、兵士たちが直面していた根本的な問題とともに立ち向かわず、むしろ軍の命令に彼らを順応させるよう指導・治療していた。リフトンは専門家のこうした態度を「アドボカシー」を失ったものとして批判している（Lifton 1978）。アドボカシーは「代弁」「権利擁護」などと訳されることが多いが、リフトンがここで言う advocacy は専門家の政治的・倫理的な参入の在り方を指している。政治的な踏み込みが求められる場面で、専門家が見かけ上の中立性・非政治性を逸脱してでもクライアントの肩を持って戦うというニュアンスがある。

リフトンは被爆者研究を終えたあと、アメリカで反戦ベトナム帰還兵たちと活動を始めることになる。帰還兵たちは、共に仕事をするための「ベース・ラインをつくること」（Lifton 2014, 187）をリフトンら専門家に求めたが、栗原も同様に反核と投下責任の明確化という「ベース・ライン」の共有を求めていたと言いうことができるかもしれない。

2.3 石田忠による批判的継承

『死の内の生命』を正面から読み込んだ数少ない研究者として、一橋大学の社会学者・石田忠が挙げられる。石田は1965年の厚生省による被爆者調査に参加したのち、この調査結果を批判して独自に被爆者との面接・交流を続けた。

『死の内の生命』において、リフトンは被爆者の「精神的麻痺」（自身や世界との生き活きとした交流が失われていること）や、自分だけが生き残ったことの「罪責感」を詳細に分析した。石田の研究を引き継いだ濱谷正晴によれば、本書が邦訳された当時、石田はこれらの概念を正しく理解した数少ないひとりの一人だった（濱谷 2009）。

石田は『死の内の生命』をどのように読んだのだろうか。石田がリフトンの分析を読み込み、批判的に発展させようとしている場面を取り出してみよう。石田はリフトンの「精神的麻痺」概念を是認しつつ、それを「無意識の」心理的機制としてのみとらえること」は問題であり、「精

神的麻痺が被爆者の思想的営為の一局面として存在するという事実」をリフトンが見逃している」と批判している。石田によれば、被爆者は「想像力の枯死」の状態にある。すなわち、自身の体験を、個人から社会へ、また社会から個人へという二重のパースペクティブにおいて、実存的・社会的・歴史的に意味づけるための手がかりを失っている。石田は被爆者のこうした状況を〈漂流〉と名付け、そこから〈抵抗〉への飛躍に原爆体験克服の可能性を見出した（石田 1973, 1986; また、八木 2007）。

しかしながら、この被爆体験の意味付けの不全という事態こそ、リフトンが『死の内の生命』で強調している現象であるように思われる。リフトンによれば、被爆者は自己の体験を意味付けるための精神的な基盤そのものを傷つけられている。被爆者は極限的な体験によって自己の生存や他者の死を受容し言語化するための「形式 form」を失ったのであり、その形式を再創造する営みをリフトンは「精神的再形成 formulation」と呼ぶ。精神的再形成は被爆体験の意味付けを模索する過程であり、意味付けをめぐる苦悩という点で、石田の〈漂流〉から〈抵抗〉へという理解と本質的にかき離れていないと考えられる。

一方、両者の違いが鮮明になるのは、体験の意味付けの困難さと克服の可能性のいずれに重心を置くかという点である。リフトンは前者に重心を置き、とくに死者への罪責感が体験の克服を進める上で解消しづらい課題であると分析している。これに対して、石田は罪責感についての自分の考えはリフトンと異なると述べ、罪責感には〈漂流〉から〈抵抗〉への飛躍を促す役割があるはずだと指摘している（石田 1986）。石田がリフトンよりもはるかに長期にわたって被爆者と交流を続け、政治的姿勢を共有していたことがこの違いを生んだのかもしれない。実際に、リフトンは後述するベトナム帰還兵との対話において、「生気を吹き込む罪責感 animating guilt」が外傷的体験の克服において重要であることを発見している。単純化して言えば、リフトンが広島で捉えきれず、ベトナム帰還兵から読み取ったものを、石田は被爆者から聞き取っているのである。

両者が結果的によく似た姿勢に行き着いた⁴のは、石田が外傷的体験とその回復という精神分析的モデルを『死の内の生命』から受け継いだからである、と考えることはできないだろうか。ここで言う回復とは、外傷が完全に治癒して跡形もなく消えることではなく、サバイバーが自身の体験を言語化し、社会的関係の中で意味を見出し、自身の人生の物語へ統合する不断の過程を指している。石田は独特の切迫的な文体で〈漂流〉〈抵抗〉概念を熟考し、リフトンを批判しているけれども、大枠においてはこのモデルを前提としているように思われる。

3 精神医学と PTSD

リフトンが日本社会と学術領域に与えたもっとも大きな影響は PTSD (Post Traumatic Stress Disorder 心的外傷後ストレス障害) かもしれない。PTSD 概念は 1995 年の阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件を大きなきっかけとして日本の精神医学・臨床心理学に導入され、「トラウマ」「心のケア」という言葉が一般化した。ところで、アメリカにおける PTSD の成立 (1980 年) にも

⁴ 石田は被爆者調査に携わる自身の社会学者としての「立場」を厳しく自問しているが、これもリフトンの「アドボカシー」理念と結果として似通っている。

リフトンは深く関わっている。PTSD の紹介・導入にあたって、リフトンは日本でどのように理解されてきたのだろうか。

3.1 *Home from the War* と『死の内の生命』

まず、PTSD とリフトンの関係を簡単に確認しておきたい。PTSD 成立の直接の源流がベトナム帰還兵の問題であることは常に言及される。1970 年代初頭、ニューヨークで反戦ベトナム帰還兵たちがラップ・グループと呼ばれる一種の自助グループをつくり、自分たちの苦境や怒りについて互いに語り合っていた。リフトンは精神科医のハイム・シェイタン達とこの自助グループの対話に参加していた。リフトンとシェイタンはのちに帰還兵たちの症状をアメリカ精神医学会にアピールし、疾病基準を具体化する作業に携わった（ヤング 2001, 147）。

リフトンは、帰還兵たちが自助グループでの対話のなかで自身の罪責感に気づき、無益な戦争に邁進したアメリカ社会の病理について洞察を深めていった過程をまとめ、*Home from the War* という題で公刊した（1973 年、未邦訳）。

ここで指摘しておきたいのは、この *Home from the War* が『死の内の生命』と強いつながりを持っていることである。

第一のつながりは、被爆者とベトナム戦争帰還兵とともに「サバイバー」として理解する理念である。リフトンがベトナム帰還兵たちの話を聞く時、かれがベースにしたのは「ヒロシマ」のサバイバー＝被爆者の研究だった。「死への没入ということについてわたしがヒロシマで学んだことが、ミライ村事件にも深い関わりがあるのではないかとわたしは気付いた」（*Home from the War*, 16）。「ここでとても大切なのは、わたしがヒロシマ研究で発展させた、サバイバーの心理をめぐる諸問題である [.....]」（*ibid*, 20）というように、リフトンは帰還兵の語りを、被爆者の体験との共通点・相違点を意識しながら分析している。

リフトンはベトナム帰還兵もまたサバイバーと呼ぶ。ヒロシマの被爆者が爆心地という生死の秩序が崩壊した世界に足を踏み入れた人びとであるように、帰還兵はベトナムという明確な戦線の無いゲリラ戦の戦場で無意味な残虐行為と死の恐怖に晒された人びとであるからだ。

加害者と被害者という区別からみれば、帰還兵と被爆者を同列に扱うことには異論があるかもしれない。しかしリフトンはこの区別をあえて宙吊りにしたうえで帰還兵と被爆者をいずれもサバイバーと呼んでいる⁵。その前提にあるのは、極限状況を生き延びたひとの声を聞き、その語りから社会変革の糸口を探すという理念である。

第二のつながりは、アドボカシー・リサーチという研究態度である。前述のように、リフトンは被爆者研究の後にアメリカで反核・反戦の立場を明確にしてゆくが、その動因は言うまでもなく被爆者の語りを直接聞いたことにあった。『死の内の生命』序章でリフトンは、初めて被爆者

⁵ しかしながら、リフトンが *Home from the War* においてミライ村虐殺事件の殺害に加担もしくは事件を目撃した米兵を「サバイバー」と呼んでいることに微妙な違和感が残ることも確かである。言葉の直接的な意味からすれば、ミライ村事件のサバイバーとは何より殺されかけたベトナム人村民であるはずだからだ。しかし本書はベトナム人の証言を全く収めていない。

にインタビューを行ったとき、部屋に原爆が落ちたかのような衝撃を受けたと記している。その後リフトンは反戦ベトナム帰還兵たちと活動を共にしてゆくが、これも広島での研究によるかれの政治的な変容の延長線上にあった。やや単純化して言えば、広島で被爆者と接したからこそ、リフトンはベトナム帰還兵たちと活動を行うことができたのである。

このように、リフトンにとって『死の内の生命』と *Home from the War* は内容上も理念上もきわめて密接につながっており、その先に 1980 年の PTSD 成立があった。リフトンをたどる限り、PTSD の思想的源流のひとつは「ヒロシマ」にある。

しかしこれまで、日本の精神医学や臨床心理学の分野において、この二つの研究はひとつながりのものとして読まれてこなかったように思われる。リフトンはしばしば、ベトナム帰還兵と共に活動し PTSD 成立に重要な役割を果たした医師として言及される。また、被爆者のトラウマという問題に関してもリフトンはその先駆者として再評価され始めている。しかし、この二つの仕事が別々に言及されており、両者をつなぐサバイバーの思想や、専門家のアドボカシーといった理念は十分に検討されていないように思われる。

3.2 野田正彰の研究

精神科医・野田正彰の『喪の途上にて 大規模事故遺族の悲哀の研究』(1992)、『戦争と罪責』(1998) は、リフトンのサバイバー研究全体を読み込んだうえで展開された日本で唯一の仕事である。『喪の途上にて』は日航機御巣鷹山墜落事故の遺族の悲嘆の過程を追跡したルポであり、『戦争と罪責』は日中戦争および太平洋戦争に従軍した旧日本軍兵士が過去の自身の加害行為に向き合うさまを描きとった記録である。

野田はこれらの研究においてリフトンの方法論を正確に再現している。いずれの著作でも、長期間にわたって一群の生存者に個別インタビューを重ねるというリフトンの手法が取り入れられている。さらに、「トラウマ」を疾病と治療という枠組みではなく、加害・被害の生存者とその歴史のあるいは社会的な意味という視座のもとで理解しようとする姿勢はリフトンの精神史研究のそれにほかならない。『喪の途上にて』では墜落事故の遺族がみずからの生存者使命を模索する過程に同行し、『戦争と罪責』では兵士の精神的麻痺と罪責感を手がかりに証言が引き出されてゆく。

前述の石田忠らもリフトンの研究を承継しているが、あくまで「広島」の文脈に限定されている。これに対して、野田はリフトンの著作を一貫して読み込み、サバイバー研究の根本的な理念を把握したうえで、独自の仕事を展開している。

おわりに

本稿では、日本との深い関わりの中で生まれたリフトンの研究が、日本でどのように受容され、影響を与えてきたのかを検討してきた。『思想改造の心理』は宗教学におけるカルト研究に影響を与え、『死の内の生命』は社会学者や被爆者からさまざまな応答を引き出した。また、リフトン自身もヒロシマでの体験から自身の思想を発展させ、それが PTSD の成立につながっている。

しかしその PTSD をとりいれた日本の精神医学では、背景にあったリフトンのサバイバー研究の理念はあまり読み込まれていない。

これらの動向を整理すると、リフトンはたしかに読まれているものの、やはり断片的であることに気付かされる。各分野における影響が相互にほとんど連絡しておらず、リフトンのさまざまな著作に一貫しているサバイバー研究の理念が読み取られていないように思われる。

リフトンの研究が包括的に読まれてこなかったのは、サバイバーの存在を尊重するという理念が日本の戦後社会や学術文化に欠けていたためであるかもしれない。その存在と声を尊重することは、いわゆる「戦争の記憶」を刺激することに他ならなかった。リフトンの思想が断片的にしか受容されていないことは、トラウマに関する国内の研究や言説が戦争の記憶から切り離されがちであるということ、つまりトラウマをめぐる表象自体が神経症の状況の内にあることを暗示している。しかしその検証は、より広範な社会的・戦後思想的な作業を必要とするだろう。

(たかはらこうへい 臨床哲学・博士後期課程)

【リフトン主要著作一覧】

1. *Thought Reform and the Psychological Totalism: a Study of "Brainwashing" in China*, Norton, 1961.
小野泰博訳『思想改造の心理 中国における洗脳の研究』誠信書房、1979年。
2. *Death in Life: the survivors of Hiroshima*, Random House, Inc., New York, 1968.
榊井迪夫、湯浅信之、越智道雄、松田誠思訳『死の内の生命』朝日新聞社、1971年。
榊井迪夫、湯浅信之、越智道雄、松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く 精神的考察 (上・下)』岩波現代文庫、2009年。
3. *Revolutionary Immortality: Mao Tse-Tung and the Chinese Cultural Revolution*, Random House, 1968.
井上勇訳『革命の不死性 毛沢東と中国文化大革命』時事通信社、1970年。
4. *Boundaries: Psychological Man in Revolution*, Random House, 1969.
外林大作訳『誰が生き残るか プロテウスの人間』誠信書房、1971年。
5. *History and Human Survival: Essays on the Young and the Old, Survivors and the Dead, Peace and War, and on Contemporary Psychohistory*, Random House, 1971.
小野泰博、吉松和哉訳『終わりなき現代史の課題 死と不死のシンボル体験』誠信書房、1974年。
6. *Home from the War: Vietnam Veterans-Neither Victims nor Executioners*, Simon & Schuster, 1973.
7. Lifton, R. J., Olson, E., *Living and Dying*, Praeger Publishers, 1974.
R. J. リフトン、E. オルソン (中山義之訳)『生きること死ぬこと』金沢文庫、1975年。
8. *The Life of the Self: Toward a New Psychology*, 1976.
渡辺牧、水野節夫訳『現代、死にふれて生きる 精神分析から自己形成パラダイムへ』有信堂、1989年。

9. 加藤周一、R. J. リフトン、M. ライシュ（矢島翠訳）『日本人の死生観（上・下）』岩波新書、1977年。
10. *Advocacy and Corruption in Healing Profession*, in: Figley, C. R.(ed), *Stress Disorders among Vietnam Veterans: Theory, Research and Treatment*, Brunner/Mazel, 1978.
C. R. フィグラー編（辰沼利彦監訳）『ベトナム戦争神経症 復員米兵のストレスの研究』岩崎学術出版社、1984年。
11. *The Broken Connection: On Death and the Continuity of Life*, Simon & Schuster, 1979.
12. *The Nazi Doctors: Medical Killing and the Psychology of Genocide*, Basic Books, 1986.
13. *The Future of Immortality and Other Essays for a Nuclear Age*, Basic Books, 1987.
14. *The Protean Self: Human Resilience in an Age of Fragmentation*, Basic Books, 1993.
15. Lifton, R. J. & Mitchell, G., *Hiroshima in America: Fifty Years of Denial*, Putnam Adult, 1995.
R. J. リフトン、G. ミッチェル（大塚隆訳）『アメリカの中のヒロシマ（上・下）』岩波書店、1995年。
16. *Destroying the World to Save It: Aum Shinrikyo, Apocalyptic Violence, and the New Global Terrorism*, Owl Books, 2000.
渡辺学訳『終末と救済の幻想 オウム真理教とは何か』岩波書店、2000年。
17. *Superpower Syndrome: America's Apocalyptic Confrontation With the World*, Nation Books, 2003.
18. *Witness to Extreme Century: A Memoir*, Free Press, 2014.

【その他、本文中で参照した文献】

19. 有末賢「戦後被爆者調査の社会調査史」、浜日出夫、有末賢、竹村英樹編著『被爆者調査を読む ヒロシマ・ナガサキの継承』慶応義塾大学出版会、pp.1-34、2013年。
20. 石田忠編著『反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社、1973年。
21. 石田忠『原爆体験の思想化 反原爆論集I』未来社、1986年。
22. 菊池浩光「わが国における心的外傷概念の受けとめ方の歴史」『北海道大学大学院教育学研究紀要』119、pp.105-138、2013年。
23. 栗原貞子『ヒロシマの原風景を抱いて』未来社、1975年。
24. 栗原貞子『核時代に生きる ヒロシマ・死の中の生』三一書房、1982年。
25. 小沼十寸穂ほか「原爆症後遺症としての間脳症候群」『日本醫事新報』1547、pp.4853-4860、1953年。
26. 櫻井義秀「カルト論の現代的射程」『現代社会学研究』17、pp.1-19、2004年。
27. 島蘭進「マインドコントロール論を超えて 一宗教集団の法的告発と社会生態論的批判（第1回）」『精神医学』40（10）、pp.1044-1052、1998年。
28. 島蘭進「マインドコントロール論を超えて 一宗教集団の法的告発と社会生態論的批判（第2回）」『精神医学』40（11）、pp.1144-1153、1998年。
29. 都築正男「慢性原子爆弾症について」『日本醫事新報』1556、pp.783-789、1954年。

30. 中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波書店、2007年。
31. 野田正彰『喪の途上にて 大規模事故遺族の悲哀の研究』岩波書店、1992年。
32. 野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1998年。
33. 野中猛ほか「被爆者37例にみられた精神障害 被爆後40年の調査」『精神医学』29(7)、pp.725-733、1987年。
34. Hassan, S., *Combatting CULT MIND CONTROL*, Park Street Press, Vermont, 1988.
S. ハッサン (浅見定雄訳)『マインド・コントロールの恐怖』恒友出版、1993年。
35. 濱谷正晴「原爆体験と〈心の傷〉」『IPSHU 研究報告シリーズ』41、pp.1-38、2009年。
36. 船橋喜恵「広島大名譽教授 舟橋喜恵さん 被爆者像の変化 心の傷越え核廃絶訴え」『中国新聞』2008年1月6日付朝刊。
37. 操担道ほか「原子爆弾被爆者について」『日本醫事新報』1570、pp.2204-2208、1954年。
38. 八木良広「体験者と非体験者の間の境界線 原爆被害者研究を事例に」『哲學』117、pp.37-67、2007年。
39. 八木良広「原爆問題と被爆者の人生に関する研究の可能性 —R. J. リフトンのヒロシマ研究とそれに対するさまざまな反応をめぐって—」、前掲浜日出夫ほか編著『被爆者調査を読む』pp.151-176、2013年。

How have Japanese readers understood the concept of survivorship in R. J. Lifton?

Kouhei TAKAHARA

This paper discusses how the works of Robert Jay Lifton, the psychiatrist, have been read and understood by Japanese researchers and atomic-bomb survivors (hibakusha). Lifton is considered to be one of the pioneers of psychiatric, historical and social research on survivors in historic crucial events. Some work of Lifton stems from the narratives of Japanese survivors, especially atomic-bomb hibakusha in Hiroshima. In addition, half of the books by Lifton have been translated into Japanese. But Lifton himself and his ideas on survivorship are not famous in Japan. Understanding and acceptance of Lifton in Japan remains fragmental.

Thought Reform, Lifton's first book, is referenced in Japan by religious studies scholars in the context of mind control by a cult, especially since the terrorism enacted by Aum Shinrikyo. However, his fundamental interest in the mutual relationship between historical/social powers and the individual mind is not used or analyzed by Japanese religious studies scholars in their interpretation of Aum.

The core ideas in *Death in Life*, his most famous book about atomic bomb survivors in Hiroshima, were investigated by some Japanese sociologists. But this book was criticized by a famous hibakusha, Sadako Kurihara. The essence of her criticism was that by not focusing on anti-war and anti-nuclear weapons movements, Lifton does not show solidarity with or advocate for atomic bomb survivors.

Lifton's book that illustrates the recovery of anti-war Vietnam Veterans, *Home from the War*, is referenced by Japanese psychiatry studies researchers, in order to explain the establishment of PTSD. But the important connection between *Death in Life* to *Home from the War* is not considered in Japan. The reason for such an omission is that the consistent thought behind these works, namely the concept of survivorship, has not taken root in Japan.

〔キーワード〕

ロバート・ジェイ・リフトン、サバイバー、原爆、ベトナム帰還兵、PTSD